

2026年6月12日

報道関係者各位

# 発達心理学が専門の文学部・大久保圭介講師が研究成果を発表 —日本で初めて父子関係のアタッチメント タイプを分類し、関連要因を検証—

## 育児の楽しさと敏感さのズレが アタッチメントの乱れにつながる事が判明

国士舘大学文学部の大久保圭介講師（研究当時：東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター特任助教）、広島大学大学院人間社会科学研究科の梅村比丘教授、静岡健康静岡社会健康医学大学院大学の新屋裕太講師（研究当時：東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター特任助教）らの研究グループは、日本で初めて父子関係におけるアタッチメントタイプ<sup>注1</sup>を分類し、その個人差に対して、子どもへの敏感な関わり方（敏感性：<sup>注2</sup>）と育児に感じる喜びのバランスが関連していること、また育児時間は関連がなかったことを示しました。これまで、日本を含むアジア圏の母子におけるアタッチメントタイプの分類に関しては、回避型と比べてアンビバレント型が多いことが報告されてきましたが、同じ傾向が父子関係においても示されたことで、その傾向が関係性を問わない文化的な特徴であることが傍証されました。本結果は、親子関係や子育ての文化差を理解する上で大きな意義があります。

本研究は、国際学術誌「Early Child Development and Care」（オンライン版：6月18日）に掲載されました。

### ポイント

- ・日本人の父子関係におけるアタッチメントタイプを分類し、個人差と関連する要因を検証した日本初の研究
- ・母子関係で示されていた傾向が、父子関係においても示されたことで文化的な特徴であることが証明された
- ・育児の質向上には、育児時間よりも父親が育児に感じる喜びが関連していると判明

### 研究の背景

アタッチメントは、不安や恐怖を感じた際に、この人なら自分を守ってくれるだろうという大人に対して、子どもが近接する行動、または、そうした行動が起こりうるに十分信頼できる関係性のことを指します。日本語では、愛着と言われるものですが、2023年12月にこども家庭庁が、こども施策の基本方針として定めた「こども大綱」の中でも、乳幼児期から安定したアタッチメント（愛着）を形成することの重要性が強く押し出されています。これまで、乳幼児期のアタッチメントに関する研究のほとんどは、母子関係を対象に行われてきました。しかし、父親の育児参加への社会的関心が高まるに伴い、父子関係におけるアタッチメントについて、その個人差を分類し、それらと関連する要因を明らかにする必要性が求められていました。そこで、本研究グループは、日本の父子を対象に、アタッチメントタイプを分類し、その関連要因を検証するための実験調査を行いました。

### 研究の概要

本研究は、ストレンジ・シチュエーション法<sup>注3</sup>を用いて、日本人の父子関係におけるアタッチメントタイプを分類し、その個人差と関連する要因を検証した日本で初めての研究です。54組の父子を対象に実験を行い、アタッチメントタイプを分類し、育児の量、質（敏感性）、育児に感じる喜びなどの要因との関連を検討しました。

まず、アタッチメントタイプを分類したところ、安定型が最も多く、回避型よりもアンビバレント型が多いという結果になりました。これまでの母子を対象にした日本や東アジアの研究で得られている分類の偏りと一致しており、アンビバレント型が多いという文化的な特徴が関係性に依らないものである可能性が示唆されました。

分類に関しては、これまでの父子アタッチメント研究では報告されていなかったユニークなケースが見られたことも本研究の重要な結果です。一つは、「実験中にその場にはいない母親を呼んでしまう」ケース、もう一つは、「父親との分離場面で強く泣いているにもかかわらず、再会する場面で近接行動なく泣き止む」ケースです。この二つのケースからは、アタッチメントの伝統的な評定手法である SSP を、従来の方法で、父子サンプルに適用することの難しさを示しています。

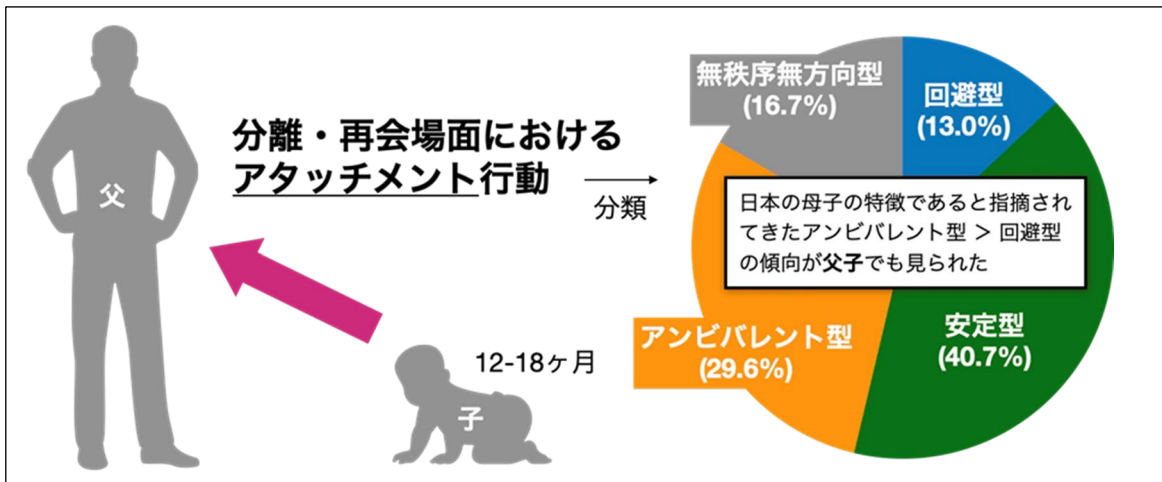


図1：本研究の概念図とアタッチメントタイプの割合

続いて、安定型か不安定型（回避型・アンビバレント型・無秩序無方向型）かを予測するロジック回帰分析<sup>4</sup>を行いました。結果として、いずれの要因も、統計的に有意な関連を示しませんでした。ただし、それらの関連要因について4つのタイプ別に多重比較<sup>5</sup>をしたところ、無秩序無方向型の子どもの父親は、喜び感情と敏感性の差得点が、安定型やアンビバレント型よりも有意に高いことが示されました。これらのことから、アタッチメントの重要な規定要因として従来指摘されてきた敏感性に加えて、どれだけ育児を楽しんでいるかという態度要因とのバランスが重要であることが示唆されました。また、育児の量も関連がありませんでした。

### 研究結果のまとめ

これまで、日本を含むアジア圏の母子におけるアタッチメント回避型と比べてアンビバレント型が多いことが報告されてきましたが、同じ傾向が父子関係においても示されました。アタッチメントの個人差に対しては、子どもへの敏感な関わり方と育児に感じる喜びのバランスが関連していること、また育児時間の関連はないことが示されました。本研究の結果は、父子関係におけるより安定したアタッチメントを形成するためには、育児参加の量は関連がなく、それよりも子どもに温かく敏感に関与できることや育児に喜びを感じるこの方が重要であることを示唆するものです。

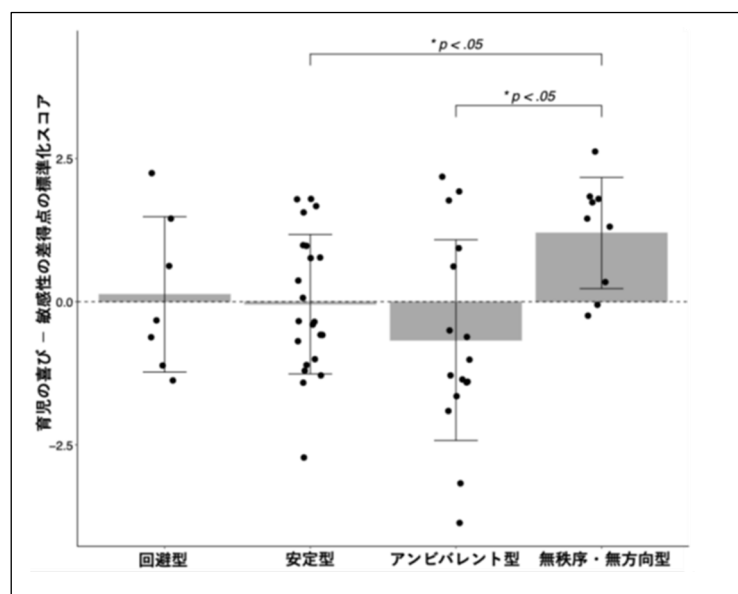


図2：育児に感じる喜びおよび敏感性の差得点スコアをタイプごとに比較

## 研究結果の意義

日本では近年、父親の育児参加時間を増やすための政策が推進されています。しかし、本研究の結果は、育児参加の量を増やすだけでは不十分であり、それよりも、子どもに温かく敏感に関与できることや育児への態度の向上を支援する介入・政策の重要性を示唆するものとなりました。本結果は、親子関係や子育ての文化差を理解する上で大きな意義があります。

## 用語解説

### 注1) 感性

子どもが泣いたり、ぐずったり、笑ったりしたときに、親がその気持ちやシグナルに素早く、正確に気づき、温かい気持ちで応えることができる能力のことを指します。本研究では、フリープレイの様子から、Maternal Behavior Q-Sort法という指標を用いて、父親の感性を評価しました。

### 注2) ストレンジ・シチュエーション法

実験室において、ストレンジャーと呼ばれる、親子と面識のない他者（本研究では成人女性）が入退室を繰り返す状況で、親子の分離と再会を行い、一連の様子から子どものアタッチメントタイプを評価する実験手法。通称：SSP

### 注3) アタッチメントタイプ

子どものアタッチメントタイプは、安定型（Bタイプ：再会場面で親に対して近接行動を示し、ストレスを落ち着かせることができる）、回避型（Aタイプ：再会場面において、親子に対してほとんど近接行動の類を示さない、あるいは全体を通してストレスをほとんど表出しない）、アンビバレント型（Cタイプ：分離・再会場面を通して強く、持続的に泣き、攻撃的な行動も見られる）の3つに基本的に分類される。さらに、子どもの行動が組織化されているかどうかという基準で、無秩序・無方向型（Dタイプ：近接と回避が混同した行動が見られる、フリーズ、親への恐怖心、奇声・奇行などが見られる）かどうかにも分類される。

### 注4) ロジック回帰分析

ある事象が起こる確率を、説明変数を用いて予測する分析方法です。本研究では、アタッチメントタイプが安定型になるかどうかを、複数の変数によって説明するモデルの解析を行いました。

### 注5) 多重比較

群間の平均値の差を比較する検定手法で、3群以上の比較において、どの群間に差があるかを調べることができます。本研究では、4つのアタッチメントタイプ間で、関連変数の平均値差があるかどうかを検定しています。

## 論文情報

論文名：Attachment Classifications and their Correlates in Japanese Father-Infant Dyads

和訳：日本人父子におけるアタッチメントタイプの分類と相関関係

著者名：Keisuke Okubo\*, Tomotaka Uemura, Kiriko Emi, Hanae Sanada, Azusa Nishimura, Yuri Hirata, Yuta Shinya（大久保圭介、梅村比丘、江見桐子、眞田英恵、西村あずさ、新屋裕太）

\*責任著者：国士舘大学文学部教育学科 講師 大久保圭介（おおくぼ けいすけ）

掲載誌：Early Child Development and Care

DOI：10.1080/03004430.2026.2686139

## ◆本プレスリリースに関するお問い合わせ

国士舘大学 文学部 教育学科

講師 大久保 圭介

TEL：03-5481-5298 E-mail：keisuke.o@kokushikan.ac.jp

（広報担当）

学校法人国士舘 理事長室広報課 〒154-8515 東京都世田谷区世田谷 4-28-1

TEL:03-5481-3115 FAX:03-5481-5477 E-mail:kouhou@kokushikan.ac.jp



大久保講師